

## 4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（3）

### －実習協議の内容の充実－

#### A Tentative Program for University Students' Teaching Practice on Early Childhood Education (3)

#### － The Enhancement of Student Training Consultation for Childhood Education －

向 出 圭 吾\*

#### 要旨

本学の幼稚園教育実習では、指導計画を環境図で立案する等の試みを行ってきた。実習生が立案した指導計画をもとに、実習園の保育者と実習生が共に指導計画を見直し、改善を繰り返す実習協議が行われるようになりつつある。このような協議の効果を、実習園の実習事後アンケート及び実習生の事後レポートによって検討した。その結果、実習生には幼児の遊びについて深く考えようとする積極的な姿勢が認められ、保育者には実習生が考える遊びを援助しようとする指導の在り様の変化が伺われた。

**キーワード：**実習生の指導計画(intern student's teaching plan's)／

実習協議(student training consultation for childhood education)／

見直し(revise)／改善(improvement)

#### I. 本学が取り組む実習協議の見直し

本学の段階的幼稚園教育実習プログラム<sup>1</sup>は2014年度の指導計画立案の位置づけ<sup>2</sup>を経て2015年度には次の段階として、立案した指導計画を教育実習の中でいかに効果的に利用できるのかを模索した。本稿は、実習生が事前に立案した指導計画を実習前及び実習期間中に実習生と実習園の保育者とが指導計画を見直し、改善していく協議の過程に注目し、実習協議の在り様について考える。

#### 1. 実習生と現場保育者の間の協議の内容

現行の幼稚園教育要領では、指導計画の作成にあたっての項目に「・・・幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての反省や評価を適切に行い、常に指導計画の

改善を図ること」と記されており、それを実現するために各幼稚園は、指導計画・実践・評価・改善・そしてまた指導計画と繋がる一連のPDCAサイクルを計画的組織的に行うカリキュラムマネジメント<sup>3</sup>を求められている。つまり幼稚園現場の指導計画は、それを実践した後の評価・見直しの過程を重視する傾向にあり、次に繋がる指導計画を作成することで保育者の質の向上を目指していると言える。

本学では実習指導の重要なツールとして指導計画の立案を取り入れ、3年次6月の15日間の幼稚園教育実習Ⅱでは、15枚以上の連続性のある指導計画を書くことを義務付けている。この指導計画は実習園の幼児の生活を知らずに書くのではない。配属先が確定する前年度10月から実習生は事前訪問を開始し、実習園行事への参加や自発的な園訪問を重ね、園の情報を得て2月に5日間のプレ実習を行う。実習園の幼児の生活、保育者の動きを自分なりに掴むのである。しかし、4月は新入・進級・担任の交代と幼稚園現場は忙しく、5

\* MUKAIDE, Keigo

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科  
保育内容・環境、幼稚園教育実習指導

月には県内の他の養成校の実習があり、実習園の中には本学実習生の事前訪問を好まない園も少なくない。比較的安定した10月から2月にかけての時期と、新学期を迎えた4、5月とでは幼児の園生活はかなり異なっており、6月の指導計画を考えるうえで4月以降の自発的な訪問は重要である。そこで、一般的な事前訪問ではなく、指導計画の事前協議のための訪問を園に依頼し、実習生においても事前訪問の目的を焦点化させることとした。実習園に送付する幼稚園教育概要に加えて、説明書「実習生を受け入れていただくクラスの先生へ」(図1)を作成し、保育者それぞれに宛てて、実習生の事前訪問と事前実習協議をお願いした。園宛、あるいは園長宛の依頼では届きにくい実習担当者の考える実習内容を実習生を担当する保育者に直接に届けたいと願ったのである。

ここで特出すべきは「実習が始まる前に」「遊びのプラン(指導計画)」を見ていただくということである。6月の幼稚園教育実習Ⅱに向けて実習生が考えた遊びのプラン又は指導計画を事前に

見てもらい、幼稚園現場の担当保育者から「これはできない。なぜなら・・・」「この遊びを膨らませよう。なぜなら・・・」とコメントを引き出すことで、実習生は遊びのプラン又は指導計画に書き加えや書き直しを行い実習園の幼児にあった指導計画を用意して実習に臨むようにと企図した。事前協議のねらいは、6月の幼稚園教育実習Ⅱで実践する指導計画の充実であった。実習開始までに時間がある中で保育者から助言を得れば、実習生自身がプランの見直しに取り組めると期待したからである。実習生は実習園の保育者から示される「なぜなら・・・」という理由をもとにして、より実習園の幼児に合ったプランを考え、実習に臨む態勢を整えていくのである。

実際に、実習開始前に実習生と担当保育者との協議が経験されていることで、実習開始後の保育者からの指導には変化があったようである。以前であれば、実践の前日か数日前に与えられた時間の指導計画を提出し、「とにかくやってみなさい。」あるいは「これはできない。」と指導計画に

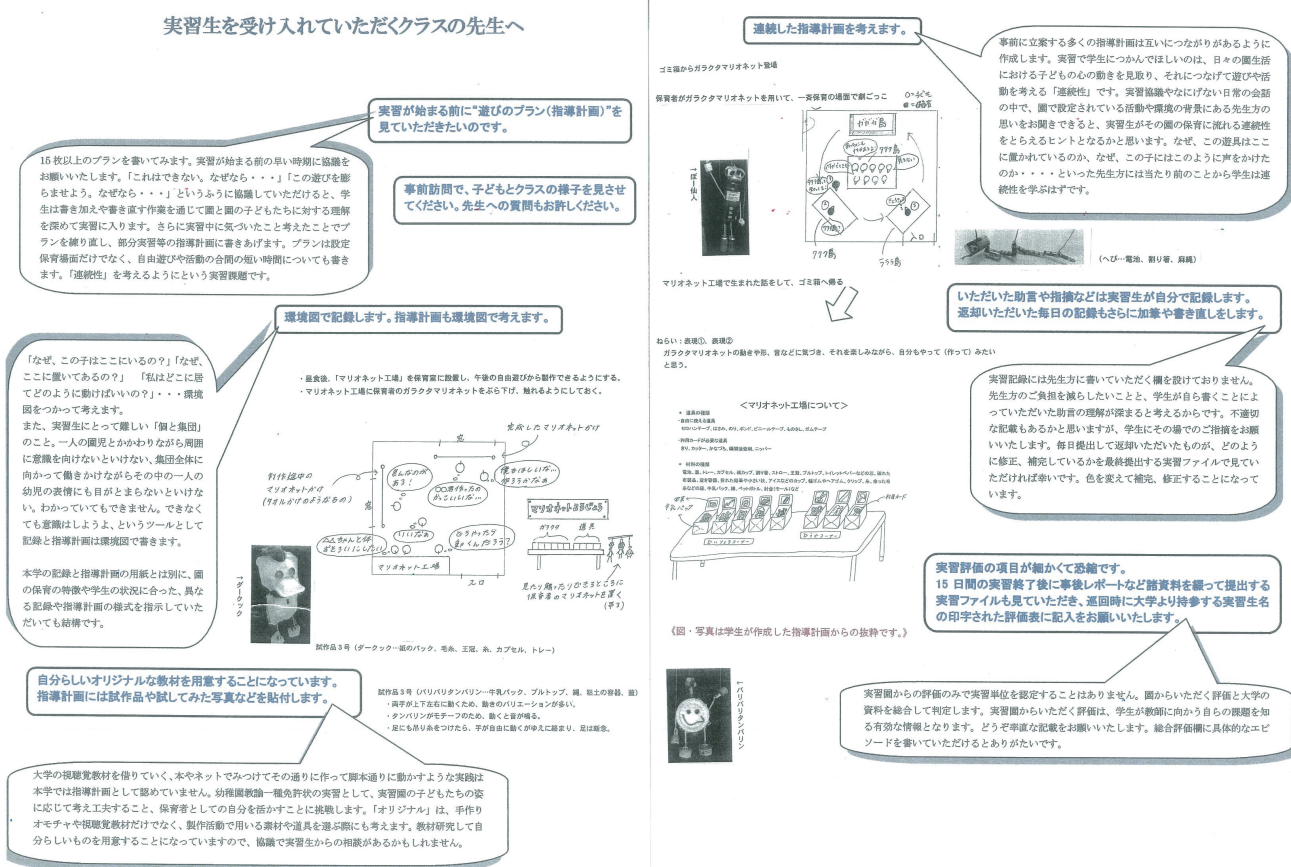


図1 幼稚園教育実習Ⅱ概要ファイルの冒頭示した本学の実習に対する方針



関しては一方的であることが多かった保育者と実習生の関係が、事前協議を経て始まる実習においては、お互いが指導計画に対して思うことを言い合う関係になったようである。実践後の協議においても、以前であれば実習生の反省と保育者の助言という形で終わることが多かったのだろうが、実習生と保育者が一緒に実践を振り返り、新たな気づきやアイデアが出て、もう一度やってみることになったり、別の遊びのプランにつながるものが起こってきた。その間、指導計画は消して書き直したり新たな用紙に書くのではなく、文字の色を変えて上書きしたり別の用紙に記入して以前の計画がわかるように上から貼り付けていくこととした。自らの遊びの指導計画がどのような推移を経て変化していったのかが見えることによって、実習生は指導計画の作り直しの過程を再体験することができ、作り直すことに対する抵抗がなくなり、むしろ作り直してよいものになっていく楽しさに目覚めていく者もあったようである。実習生が立案し見直しを加えた指導計画の一例を図2に

示す。

また、遊びのプラン・指導計画の実践については、実習記録とは別に、指導計画とセットの実践後の記録を書き、保育者に提出される。保育者からの指摘や助言を、実習生自身が書く欄を設けてあり、保育者の指摘や助言を実習生がどのように理解したかを保育者が把握できるようにしてある。指摘や助言が実習生にどのように活かされているかが保育者にわかることによって、実習協議が確実なものとなることをねらいとしている。

このように、本学の幼稚園教育実習では指導計画の位置づけを見直したことで、現場保育者との実習協議の内容が変わってきた。その効果についてはⅡ章で検討する。

## 2. 遊びの実践を巡る学生間での協議の体験

本学の幼稚園教育実習指導は、少人数のグループでの協議中心の授業形態で行われ、実習報告会も実習経験者が実習予定者との小人数のグループで情報を交換し合う。幼稚園教育実習指導Ⅱは、

遊びのプラン No. 9 遊びの名前 あるいはキーワード (セタの製作)

この遊びを設定した理由

- ・導入として、「なぜセタにさざがわりをするの？」という紙芝居を読ませる。
- ・きれいな包装紙や凹凸のある紙など様々な種類の紙を用いて、四角つなぎと三角つなぎなどのつなぎ紙を作りつくる。
- ・よく目にする折り紙や画用紙なども用いて、紙によって角切りこころや口の太さが違うことに気づけるよう設定する。

一(作り方)

- ・様々な種類の紙を四角形や三角形、また半分に折ってつくる。ちぎってもいい。



半分に折る。  
同じ色をのり、ぎざぎざにする。

- ・自分のとったものをのりをつけていく。
- ・製作が済んだ後も紙が自由に使えるよう設定する。

新しい素材に気づき、通称する遊びに使う

本自由遊びの時間中に製作コーナーとして設定する。  
箱の中に紙を入っており、そこから選んで使えるようにしておく。

↓ 1人1人の名前 (全部つづ)

外国では、セタの最後に小さい管に1人1人の作品をつなぎ  
持ち帰るのびこのつなぎで1人1人名前をつけ、全員作り、  
最後に持ち帰るようになる。

↓ 各園からのプレゼントとして紙がセタ紙(実習生が作る)が同じようなもの  
も多かった為、内容を変更し、全員が作本(でも、作りたいと思えば)  
作り、壁面構成に作りつけていけるようにした。  
↓ そのなかでこのあかじの実習生が作った紙を壁面(ポスター)に貼り付け  
してあかじ保育室に製作スペースを設定する製作を行った。

事前準備  
多くの種類の紙を用意する。大きい紙は製作に使用しやすいサイズに切る。紙芝居。  
配置事項  
のりなどものを置くところを用意しておく。紙が数時間ハミを剥がれなくなっているように指導する。

検討課題  
作り手と紙芝居を兼ねて。

指導計画 (環境図と時系列への展開)

月 日 ( )	4 歳児	クラス名: くま	幼児数: 34 名
活動名	活動のねらい (主語は子ども) 紙の製作 (うなぎ) 様々な種類の紙を生かし、思い思いのうなぎを制作せよ。 工夫することを楽しむ。工夫して作る。		
環境図	教師の動き・予想される子どもの姿 		
時系列への展開	9:00 9:50 10:10		

(8時45分参集) 講師登場  
 所収品整え  
 うなぎの手紙  
 材料並  
 製作  
 自由遊び  
 片づけ  
 材料並  
 仕上げ  
 発表の会

図2 実習生が立案し見直しを加えた指導計画の例

科目としては3年次前期の配当であるが、それ以前に履修条件として学生に取り組ませる活動がある。8月に実施される3回のオープンキャンパスに行う模擬授業として、県内の幼稚園3園の幼児を大学に招待し、幼稚園教育実習履修予定の2年生が遊びを企画し実践する。少人数グループでの立案、実践である。後日に招待した幼稚園を訪問し、参加した保育者から話を聞く。事後協議である。3年生5月には大学行事Enjoy!ミッションにおいてオリジナル手作り視聴覚教材を用いた遊びを同学校法人の幼稚園児等に提供する。実習に持参する視聴覚教材の実践である。ここでも5、6人の小人数グループで、各自の教材が生きるようにグループ内で協議を重ね、グループとしてのパフォーマンスとなるように指導計画として立案する。時期的に各自が実習園との事前協議を行う前哨戦のような役割を果たす。グループでの事後協議を行い、改善点をあげ、実習で実践するための指導計画へとつなげていく。

3年次までに幼稚園教育実習、保育実習、あるいは小学校教育実習を終え、4年次では自分の研究と就職活動に時間を費やすように組まれている本学のカリキュラムであるが、この4年次に実践の場を用意することによって、それまでの学びの集大成を図っているところである。そのような実践の場の一つが学院行事Enjoy!ミッションでの遊びの広場の運営である。入学して間もない1年生と組んで幼稚園児や高校生に遊びを提供する実践で、実習で指導計画を実習園の実情に合うものに見直し、改善しようとした体験が生かされる。2015年度のEnjoy!ミッションでは、4年生はグループでの遊びのプランを立て、事前準備から1年生を巻き込み、計画を練り直していった。さらに実践後に同グループで実践した1年生の記録の添削を担当した。1年生に対して事後指導を行ったわけで、実習をめぐる協議の経験が生かされたと言える。

## Ⅱ. 実習協議の実際

では、実際に実習園の保育者は、この実習生との実習協議をどのように捉えているのだろうか。また保育者と実習協議を重ねた実習生は、その協議にどのような意義を見出しているだろうかを見

ていく。

### 1. 実習事後アンケートの検討：保育者はどう見ているか

幼稚園教育実習については実習後に評価とあわせてアンケートを依頼し、実習内容の見直しや実習園に対する説明の改善に活用している。本章では、2015年度の幼稚園教育実習Ⅱで回収されたアンケートの記述から、今回は、指導計画を見直し改善するための実習生との協議を実習園はどう捉えたかを探ることとする。2015年度幼稚園教育実習Ⅱは45園で、3年生53名、4年生5名、科目等履修生1名、計59名が実習した。アンケートの回収数44園、回収率97.8%であった。アンケート項目は下記の3点で、自由記述による回答である。

#### Q1 実習生について

①問題と思われたことがございましたでしょうか。

②良いと感じられた点がございましたでしょうか。

Q2 実習生の指導計画（遊びのプラン）について  
実践をイメージして指導計画を立てる事、即ち、実際に現場で実践するために諸条件に応じて計画を練り直すことが実習内容の一つでした。これは園の先生方との協議内容を活かして「子どもたちにとって」を考え、計画を充実させつ経験を重ねるということだったのですがいかがでしたでしょうか。

①実習生が指導計画の見直しを経て実践のために用意した遊びは、対象の子どもたちにとって心の動く遊びになっていましたでしょうか。

②①のお答えをいただいた理由をお聞かせください。

Q3 本学の実習（プレ実習や事前協議）について  
のご意見をお書きください。

実習依頼後に実習を取り下げさせていただく学生の例も増えているのが実態です。そのことについてもご意見をお聞かせいただければ幸いです。

Q2の回答の①について、指導計画の見直しを

経て実践のために用意した遊びは、子どもたちの心が動く遊びになっていたかについて分類すると、

- ・心が動いた遊びになっていた 29園 65.9%
- ・心が動いた遊びではなかった 13園 29.5%
- ・その他 1園 2.3%
- ・回答なし 1園 2.3%

に分類された。

「心が動いた遊びになっていた」と分類したものの内17園（回答の58.6%）が②を含めて協議について記している。回答例を挙げる。

- ・協議で年齢や発達に合うように見直した計画の遊びが、一日で終わることなく継続して展開したのはよかった。
- ・事前に協議すると、何歳児向きの遊びなのかをアドバイスすることができる。それによって計画を見直し実践してもらった。実習が終わっても子ども同士で遊びが続いていた。
- ・前もって指導計画を見せてもらっていたので、実践に向けて協議がしっかりできた。
- ・その時その時の実践の流れを見て協議の中で指導計画を見直し改善していたため、教材準備が大変そうだったが、改善した活動は、子どもの姿にあった内容になっていたように思う。
- ・連続した活動を子どもたちは楽しんでた。楽しみきれない活動もあったが、そこで終わらずに協議を踏まえて次の活動に活かしていた。
- ・事前に指導計画を立て協議を重ねたからこそ、園の子どもたちの様子から、その状況に合った遊びのプランを考えることができたと思う。そのプランには連続性があり、意義があったと思う。
- ・事前の遊びのプラン、指導計画では一つひとつの活動がバラバラだったので、協議において今のこどもたちの現状を含め話し合い、継続することを意識しながら活動のつながりを、何度もプランを練り直し実践した結果、子どもが興味をもって遊べる活動になったと思う。実習生が真剣に向き合ってくれたからこそ、こちらもそれに応えた形となった。

- ・事前の遊びのプランは、やはり子どもの実態に合った活動とは言えず、協議の中でプランを見直していった。しかし実習中に実際子どもとかかわるにつれ、子どもの遊びから繋がりたい、深めたいという思いをもつようになり、一日実習に向けて新たな遊びを計画し実践するなど、常に連続性を考えた実習だった。

「心が動いた遊びではなかった」と分類したものの内5園（回答の38.5%）が②を含めて協議について記している。回答例を挙げる。

- ・指導計画については、子どもの様子や担任との協議を踏まえて練り直すことができたと思うが、進め方や声のかけ方などに課題があり、活動の内容が活かし切れていなかったように思う。
- ・教材研究や環境構成など協議の中での度重なるアドバイスを活かすことができなかった。
- ・計画の練り直しはできていたのだが、実践では教材を与えることに満足してしまい、子どもの反応や一人ひとりに配慮する意欲が低かった。
- ・実習前に幾度も顔を出し、担任との事前協議も経て、実習中も協議を繰り返し、計画を練り直していったが、教材が間に合わないなど活動が思うようにできなかった。しかしこういう経験も本人にとって大切なことだと思う。
- ・教材準備に力が入り、その思い入れが強くて、協議の助言があまり活かされず残念だ。

実習園の半数以上が、実習生の実践に対して「子どもの心が動く遊びになっていた」との回答があった。その内の6割近くが実習生との協議をあげている。これは2014年度年のアンケートでは見られなかったことである。この時は指導計画の立案、環境図について尋ねたものであった。その回答例は、

- ・実習前に指導案を書き、実習前に提出されたが、全くクラスに入らず、子どもの様子を見ずに指導案を作成することは難しいと思う。
- ・指導計画を様々に立てて、事前に準備し写真



などを利用して提出するのは良いと思う。

- ・環境図があることで、見ている子どもの様子や関係を見ることができていたように思う。

というように、養成校から提示された指導計画や環境図に対して評価する形に留まっている。しかし2015年度での回答では、実習生の遊びのプラン及び指導計画に対する評価から改善へステップアップしたように思う。つまり担当保育者と協議を行うことで、実習生が持ち込んだ指導計画はその実習園の指導計画に変わっていったといえるのではないだろうか。そのため共に計画したものが実践され、幼児の心を捉えたと感じた時、実習生はもちろん担当保育者の喜びにもなったのではないかと考える。

残りの4割に関しては、オリジナル教材の魅力や季節のものを取り入れた遊び、連続性のある遊びの実践があげられており、いずれも実習生の前向きな姿勢が伺われる。

一方「心が動いた遊びではなかった」の回答内においても協議に関しては肯定的で、後は実習生の力量の問題である。それだけ幼稚園現場の保育者は、協議に正面から向き合ってくれたことがわかる。Q3の回答で14園が、事前訪問を繰り返し事前協議がしっかりできるのはとてもよいことだと回答しているのもそのあらわれである。しかしその内の4園が、実習生の積極的な姿勢もわかるが、事前訪問の回数が多いと協議の時間をもつのが難しいし、すべての指導計画を確認するのは難しいとも回答している。これも率直な現場の保育者の声であろう。日々の仕事、他の養成校の実習指導等で本学のためだけに事前協議の時間を確保できないのも事実である。

## 2. 事後レポートの検討：実習生は協議から何を 得ているか

次に6月の幼稚園教育実習Ⅱに臨んだ実習生の事後レポートから、実習生が担当保育者との協議を通して指導計画をどのように見直し、練り直していったかを探ることとする。

### 1) 3年A子

実習前の指導計画の協議では保育者のアドバイスをいただいた。例えば的あて遊びは最初は昼食

を食べ終わることが遅く、遊びに遅れてしまう子どもを誘い遊びに入りやすいようにしようと私は考えていたが、アドバイスでは全く反対のはやく食べ終わった子どもを誘うことを意見として頂いた。はやくに登園した子や昼食を食べ終わった子を誘うことで遅くに来た子や食べ終わった子どもも「はやくご用意をして遊ぼう!」「はやくたべおわって遊ぶぞ!」というように促すことができる。・・・わたしはそこからより保育者や子どもたちが効率よく動ける、時間が短く済む方法を基準としていることがわかった。そこからもう一度指導案を見直す際「効率の良さ」という点にも注目していくことができた。

また実習期間中の指導計画協議では実習前の協議よりも細かく時間配分や子どもたちの実態を考えて見直すことが多々あった。他にも実際にその日に遊んでみて次の日への改善点を実習協議で保育者とエピソードや子どもたちの動き、反応から「ここはもっとこうした方がいいのでは…」とイメージを浮かばせることができた。

保育者はどのような事を大切にして指導案を見ていたり、動いていたりするのかを実習協議で発見することが多く、そこから日々子どもたちの姿を見て指導計画を見つめなおすことができた。しかし保育者は臨機応変に活動中でも「ここはこうすることにしよう。」と対応しており、頭で考えずぐに対応、実践する力が必要なことを学んだ。

A子の場合は、協議において自分の考えを説明し、それに対しての助言をもらっている。その助言に対して、A子の理解があり、さらに保育の中での「効率の良さ」に注目することとなった。ひとつの助言から、そこから派生するもっと広い視野をもつことが応用力の鍵となり、指導計画をよりよいものへ改善していく大きなステップとなる。

### 2) 3年B子

クラスを5グループに分け、それぞれのグループから代表者を選び、その代表者が大きな紙に寝転がり、・・・代表者にそっくりな人型の絵を完成させるという遊びを考えた。・・・このプランを、実習前のボランティアの時に先生に聞いていただ

いた。すると、「その後の遊びとして、影ふみ鬼ごっこをするのもいいかもしれないね」という助言をいただいたので、人型の絵につなげる遊びとして影ふみ鬼ごっこと影送りを入れることにした。しかし実習が始まると、時間の関係で、先に影ふみ鬼ごっこをすることになった。・・・しかし影送りまでいかず、また、人型の絵につながるようなことは何もできなかった。するとその日の実習協議で先生が、もう一度影ふみ鬼ごっこをする時間ができたことを教えてくださった。そこで、どう人型の絵につなげようか考えたところ、「影ふみ鬼ごっこでタッチされたらそこに固まるというルールにして、捕まった人は味方に自分の影をなぞってもらったらまた復活できるというのはどうかな」と先生が提案してくださった。・・・制作と運動を連続させること、そして、連続するであろうと予測していたことの順序が逆になってしまっても遊びはつなげていけることを、今回のプランで学んだ。

B子は直前での指導計画の急な変更に戸惑い、最後まで実践することができなかったが、担当保育者によって、もう一度再チャレンジできる機会を得た。そこで新たな改善策を協議の中で考えることとなる。文面上では保育者からのアイデアを採用した形になっているが、協議の中ではお互いに意見を出し合い模索していたのであろう。決して保育者の一方的な提案ではないように思う。この協議を通してB子は連続性も一方的なものではなく、考え次第でどの方向からでもアプローチがかけられることを身をもって体験した。

### 3) 3年C子

たたき染の活動を自由遊びの時間に行ったため、年中組の子ども達69人を対象にすることになり、一人一人にどういった活動なのか。

またどういうやり方なのかの説明不足になってしまった。・・・この反省を生かし、「小麦粉粘土でパン屋さん」の活動では一日実習の時の一斉活動で、全員に説明しながら進められる活動になるよう指導計画を練り直した。・・・またその説明をするために様々なパンの写真を模造紙に貼ったポスターを作って、話の最初に提示することも指導

計画に加えた。

教師との実習協議の中では、隣のクラスに小麦粉アレルギーの子がいることを配慮しなければいけないと知り、「小麦粉を保育室の外に絶対出さないこと」「手を洗う水道は保育室内の水道のみを使うこと」を配慮事項に加え、スモッグや靴の裏を拭くためのタオルも用意し、説明の際には子どもたちに「大事なお約束」として注意事項を伝えることも計画に含めた。

このことから、子どもたちの生活や遊びを、園での生活を共にし、徐々に知っていくことで、使う材料や指導の時に掛ける言葉、活動を行う時間が初めに立てていた計画から作り変えることができると分かった。またその園にいる子どもに合わせた計画に変えることで、子どもたちの遊びに対して魅力を感じ、遊びから「アジサイの本当の花はどんな色がある」など新たな発見ができるのではないかと考えた。また配慮が必要な場合には、子ども達にただ注意事項を伝えるだけではなく、なぜこうしないといけないのか、なぜだめなのかを応答的なやり取りを通して話すことでより子ども達に伝わると気付いた。またそれは、聞くときは聞くという姿勢に慣れている園の子ども達だからこそ、伝えることができたのではないかと考えた。

C子は失敗の実践からのスタートであった。しかしこの失敗から学ぶことは大きい。おそらく協議の中でクラスの子どもの実情を、自分の読み取りと担当保育者の捉え方とを照らし合わせながら自分のものにしていったのだろう。さらに小麦粉アレルギーという保育の世界には大変重要な情報を得て、その配慮に神経を研ぎ澄ましている。特に自分だけが気を付け、一方的に約束させるのではなく、子どもたちが自分なりにわかるように応答的なやり取りを模索しているところに、C子のそれだけ大事なことだという思いを読み取ることができる。

### 4) 3年D子

私はゼリーを用いた活動をしたいということから実習協議を通して話し合いを始めた。実習が終わった後に、親子活動でおにぎりパーティーがあ

ることからそのデザートとしてゼリーを作ること  
を考えているため、その導入としてゼリーを使う  
活動はどうだろうか、という言葉を担当の先生から  
頂き進めていくことになった。ゼリーを使って  
ジュース屋さんごっこが始まるかもしれないとい  
う計画からゼリーの導入をジュース作りへと変更  
した。にじみ絵の活動についても洋服を作る活動  
を考えていたが、子ども達自身の思うジュースを  
にじみ絵で作る流れに変更した。にじみ絵で出来  
上がったペーパーはちぎって、画用紙に描かれた  
コップに貼りジュースを仕上げる。次の日には、  
さらに楽しいものでジュースを作るとことで  
ゼリーのジュースの活動に繋がった。このことか  
ら、最終日の活動をするために、子どもたちの心  
の動きがジュースを作りたいと思えるような活動  
の流れを作ることが大切だと感じた。元は色水の  
活動を考えていたので、その活動も色水をジュ  
ースに見立てた視聴覚教材をすることで生かした。  
この指導計画の変更から実習期間だけでなく、子  
ども達のこれからにつながる活動も出来、子ども  
達がゼリーという素材に興味を持てたと感じた。  
事前のプラン作成の際には子ども達とこんな遊び  
をやったら楽しいのではないかと、という理由で作  
成したが、実際に子ども達の興味のあるもの、園  
での生活との繋がりからこのプランがどのように  
活かせるかを考えていくことになると改めて感じ  
た。

当初考えていたD子のゼリーの遊びは、協議の  
中で保育者から、「親子パーティーのデザートで  
ゼリーを作るので、そこに繋げるゼリーの活動に  
してほしい」という要望で、急きょD子の思惑と  
は関係なしに変更になったというのが他の学生と  
違うところである。そのためゼリーの遊びを最後  
にもってくるための指導計画の見直しが始まっ  
た。導入がジュースづくりになり、洋服のにじみ  
絵がジュースの素材になった。元々最後にもって  
くるはずの色水は、ジュースに見立てられ活かさ  
れることになる。D子にとってはガラリと練り直  
した指導計画となったが、子どもたちの今の思い  
や園の生活の流れを考慮して保育者と共に新たに  
作り上げていく協議の大切さを実感することがで  
きたように思う。

### Ⅲ. まとめ

実習生が立案する指導計画を環境図で表す試み  
は、2014年度の実習事後アンケートにおいても現  
場の保育者は実習生の遊びのイメージを把握しや  
すいものとして受け入れられていた<sup>4</sup>。また第Ⅱ  
章第1節で見たように、環境図を用いた指導計画  
をもとに本学の実習生と実習園の保育者との間で  
以前の実習協議とは異なる協議が重ねられてい  
た。この協議は実習期間のみならず実習開始前  
にも実施が依頼されたのであるが、現場の保育者  
には協力的に対応していただいたようである。そ  
れは2014年度の実習事後アンケートに比べ、事前  
協議の受け入れが難しいと答えた園は半減してい  
ることからもわかる。各実習担当保育者向けに実  
習内容を概説するメッセージを送り、事前協議を  
依頼したこととあわせ、実習生に事前協議を経た  
指導計画の立案を義務付けたことの効果であった  
と思われる。事前訪問ではなく事前協議が義務付  
けられたことで学生の実習園訪問に視点が生まれ、  
それが学生の積極的な姿勢として肯定的に受け止  
められ、現場の協力的な対応につながったよう  
であった。

一方、第Ⅱ章第2節でみたように、学生が事前  
に立案した指導計画は、実践する場の具体的環  
境、保育者から提供される幼児理解によって見直  
し、練り直しされていた。実習協議に協力的な保  
育者から提供される新たな情報によって、実習生  
は自らの指導計画を変えなくなったり、実習生と  
の協議を楽しむ保育者の語りによって保育者の子  
どもを見る目に触れ、自身の子どもを見る目が変  
化し、自らの指導計画を見つめ直すようになった。  
このようにして、実習生はより深く遊びを考  
える意欲をもつようになっていったようである。

本研究では、実習における実習協議の在り様と  
内容の変化、充実の姿を検証してきた。協議によ  
って遊びの計画を深める体験をする学生に対し、  
実習事後学習として4年次では遊びの実践を積  
み重ねることが重要であろうと考えている。例  
えば、5月のEnjoy!ミッションの遊びの広場や  
2015年度に新たに加わった9、10月の金沢市教育  
プラザ富樫での大型絵本の読み聞かせパフォー  
マンス（教職実践演習の実習体験活動）が該当す  
る。また自由参加である金沢市保育所主催「すく



すくランド」や石川県私立幼稚園協会主催「幼稚園ってどんなところ？」等のイベントに参加し遊びの実践を担う4年生も増えてきており、学生の意識の高まりが感じられる。遊びを考えることを楽しみ、そのための協議にわくわくするような保育者を現場に送り出したいと願っている。

<sup>1</sup> 詳細は、大井佳子・吉田若葉「4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（1）－幼稚園現場との協働の模索－」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 第5号 2012年で実践報告している。本プログラムのプレ実習は、本実習の前の事前学習、あるいは幼児とかかわる体験を多くもつといった一般的な目的のものではない。プレ実習と実習を通じて複数の幼稚園を体験することと、夏季預かり保育という今日的な課題に取り組む幼稚園の姿に触れることで、幼稚園というものをより総合的にとらえられるようになることがめざされている。幼稚園現場はプレ実習と実習を通じて異なる学年の学生と接し、一人の学生の複数年での姿を見ることもある。幼稚園現場が長期のスパンで学生を見ることにより、大学と「共に育てる」という感覚を持ちやすくなるように思われる。

プレ実習		実習Ⅰ	プレ実習		実習Ⅱ
幼－1 プレ実習	幼－2 プレ実習		幼－3 プレ実習	幼－4 プレ実習	
1年次 8月5日間	1年次 9月5日間	1年次 1月5日間	2年次 8月5日間	2年次 (2・3月)	3年次 6月15日間
実習Ⅰ実習園以外の幼稚園	実習Ⅰ実習幼稚園	キリスト教幼稚園	幼－1 プレ実習幼稚園	実習Ⅱ実習幼稚園	

<sup>2</sup> 詳細は、大井佳子・熊田凡子・向出圭吾「4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（2）－実習生の指導計画を通して見えた幼稚園と大学の実習像－」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 第7号 2014年で実践報告している。実習生の指導計画立案の位置づけと環境図を使った集団と個の捉え方を実習事後アンケートをもとに、幼稚園現場と養成校との実習生に対する認識の違いを6領域時代からの実習の考え方を照らし合わせながらそれぞれのもつ実習像を考える。

<sup>3</sup> 学校の教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程（カリキュラム）を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、また、そのための条件づくり・整備である。

<sup>4</sup> 詳細は、大井佳子・熊田凡子・向出圭吾「4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（2）－実習生の指導計画を通して見えた幼稚園と大学の実習像－」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 第7号 2014年 P15－17

